

人がまちをつくり まちが人を育てる



皆さんは、「札幌軟石」をご存じですか。この石は、北海道開拓の足音が聞こえ始めた明治の初め、穴の沢と呼ばれていた現在の石山地区で発見されました。石山の街は、この石の採掘により発展したのです。現在、同地区で軟石は採掘されていませんが、街のシンボルであるこの石を活用したまちづくりが地元住民の手により進められ、多くの注目を集めています。

重要無形文化財保持者塩津哲生氏を迎えての石山薪能。かがり火に彩られた夢幻の石舞台は大勢の観客を魅了しました(石山緑地)

軟石の誕生と 石山の発展

藻南公園と石山緑地を結び旧国道二二〇号沿いを歩いていると、灰白色の切り立ったがけを見ることが出来ます。

これは、今から約三万年前支笏湖誕生の際の大爆発で飛び散った軽石と火山灰が、約二十キロ離れたこの地にたい積したもので「札幌軟石」と呼ばれています。

この石は、明治五年、開拓使に雇われたワイルドとアンチセルという二人の米国人技師により発見されました。ほかの石に比べて軟らかく、加工や持ち運びがしやすかつ

たこの石は、開拓使が寒さや火事に強い石造りの建物を奨励したこともあり、現在の石山地区を中心に盛んに採掘されました。明治八年には三百人ほどの石工たちで石山の街はにぎわいを見せていたと言います。

しかし、昭和に入るとコンクリートの普及や採掘時の粉塵の問題で次第に軟石は衰退。昭和五十二年には、石山での採掘が中止されました。

それから約二十年、札幌軟石は石山の表舞台から姿を消します。しかし、石山発展の基礎を築き、長い間地元住民たちが親しんできた軟石への思い・愛着は決して消えることはありませんでした。

軟石で造られた代表的な建物



▲旧石山郵便局(南区石山2-3)



▲札幌市資料館(旧札幌控訴院。中央区大通西13)